



天文同好會觀測部月報

稀有の流星

「去月十七日火球」餘暇にしらべて見ましたが、精度の高い観測が少ないので充分の事は出来ない様ですが、大體下の如きものがたゞしからうと思ひます。

研究に用ひた資料は、花山・玉島(荒木)及箱崎(田中氏)の観測にて他に二、三素人からのを参考にしました。

消滅點は可成一致して居る様で、位置は九州大隅半島の東方海上で ($L=132.0^\circ$ $\phi=N31.4^\circ$) 高度は八十籽内外のやうです。

出現點は推定甚だ困難なるも房總半島東方海上のものらしく、獅子座群のものと確實に思はれますので ($L=142^\circ$ $\phi=N35^\circ$) (1° の差異はない積りです) の上空の模様です。高度は推定不可能です。(高度を 133 籽としてこの附近となるのであるから)。経路の全長は千籽を突破する程のものとなります。

獅子座群とすればは輻射點は花山にて漸く地平線上のものにて、玉島箱崎にては地平以下のものゝ様で、一寸めづらしい大流星です。(小楨)

天體觀測家に

天體觀測、殊に流星や黃道光觀測家に御すすめします——今更事新しいことでもないのですが、自分の觀測結果を一目瞭然たらしむるために、一冊のノート(觀測野帳)を用意し、表をつくつて觀測項目は勿論その他觀測上注意すべきことを記入しておくとな非常に便宜です。

觀測の統計、研究の場合は、自分のノートのみならず、少くとも日本に

於ける観測記録の全部についてなされるべきことが望ましく、進んで課長に相談するのです。(淡翠)

黄道光課報告

課長 倉敷天文臺 荒木健兒

黄道光課の観測報告はブレテンになるべく無味乾燥な数字ばかりならべて異人に読ますこととし、會員諸君に對しては興味多い部分をとらべて来て本欄で拜顔の榮を得ることにしたい。しかし、書かう書かうと思ひながら延してゐてとうとう月末になつて筆を取る横着の結果は、あまり香ばしからぬものになつたことは誠に申譯ない次第である。

○黄道光の寫眞——福岡の田中君が熱心してゐられる。私は三枚頂いてゐる。撮影日時と曝寫時間を示すと次の通りである。

1931 III 8 20^h 07^m — 21^h 07^m (60m)
 11 19 30 — 20 10 (40)
 12 19 30 — 20 30 (60)

それぞれうまく出てゐるが、全國から集つた三月中の観測記録をしらべてみると、この三日間の大體同一時刻に観測してゐられるのは次の諸君である。その明るさを表にしてみる。

日	観測者	K _b	K _m	N _s	S _a	Y _m
8	—	—	—	>2.0×A.	—	—
11	—	3.5×A.	4.0×A.	4.5×''	—	2.0×A.
12	—	7.0×''	4.0×''	5.0×''	4.0×M?	>1.5×''

{ K_b 窪田繁夫君 京都府福知山町
 { K_m 龜井壽彦君 大分縣白杵町
 { N_s 能勢繁生君 京都府何鹿郡中筋村
 { S_a 佐藤米茂君 島根縣濱田町
 { Y_m 山田長君 山口縣小郡町

但し、A: 駝者星座の銀河, M: 一角獸星座の銀河,

これで見てわかるやうに黄道光は非常に明るかつたのである。これ位の明るさならば寫眞観測は成功することがわかる。田中君の如き優秀な技術

に負ふことは勿論であるが。

寫眞は Camera を固定して撮られてゐるから恒星は美しい線になつてあらはれてゐる。天體寫眞に興味を持つていらつしやる會員諸君にして黄道光の寫眞觀測を試みられんことを御すすめしたい。

黄道光課通信の試み——至急を要する問題その他必要なことを謄寫版すりにして課員諸君に發送するのである。去る三月21日の第一號に始まり、四月19日の第四號まで進んでゐる。これは好評らしいから今後も號を進めて行くつもりである。課員間の親交を増すためにも面白い。

皆既月蝕時に於ける黄道光課の活動——三月29日課通信第二號で次の如く發信した。

「天界」四月號235頁記事の如く來る四月3日3時23分から皆既月蝕が見られます。その時_L月による黄道光_Lが觀測され得るものと思ひます。

時刻が早曉の頃に好都合ではありませんが、皆既食の星座は乙女座でかなり高く且銀河をはなれてゐることは幸です。

月蝕に黄道光課が活動することはこれまでなかつたことと思ひます。課員一同で最も正確に觀測し、何等かの事實を發見して、世界の學界をアツ!! と言はせたいものです。

大いに課員諸君の御奮起を期待してゐます。必要と思はれる星圖を同封しておきました。云々

この通信に對しては大反響があり、課は非常に緊張した。しかし不幸にして同日は天候にめぐまれず、成功を報ぜられた課員は意外に少くて、

下保、能勢、鹽見、村上、東の五君であるが、この内、鹽見、村上、東の諸君に取つては黄道光なるものの最初の機會が月蝕時といふ特別の場合に當り、各觀測者の記録は全くまちまちで、とてもまとめることが出来ぬのは残念である。この貴重なる觀測記録は來る九月27日早曉の皆既月蝕を迎へて比較研究した上で發表したいと思つてゐる。

尙、その日曇天で觀測不能を報告せられた龜井、佐藤、長谷、山田、吉澤、野村、原田、窪田、日野の諸君の勞をも多とする。(1931・Ⅳ・29)